様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２６日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2010～2012
課題番号：２２６５２０５７
研究課題名（和文）　外国語学習を取り入れた異文化理解としての中東－その実践的調査研究
研究課題名（英文）　Teaching the Middle East from a Viewpoint of Cross-cultural Understanding through Introducing a Language Learning - An Educational Experiment
研究代表者
小脇　光男（KOWAKI MITSUO）
熊本大学・国際化推進センター・教授
研究者番号：30136030

研究成果の概要（和文）：教養科目「中東の文化と歴史」において、異文化理解の視点から教育実践を行ないながら、教養教育にふさわしい教材および効果的な教授法の開発に向けた基礎的調査研究を行なった。日本と中東の関わりにも視点を置き、リアルタイムの中東情報を多用した教材は中東を身近な存在として意識させることに意義があった。さらに、授業の中に基礎的なアラビア文字の学習を導入する方法は異文化としての中東への関心を高めることに大きな効果があった。
研究成果の概要（英文）：I carried out an educational experiment to give freshmen a better understanding of the Middle East as a different culture. Through the experiment I developed appropriate materials focusing on close Japan-Middle East relations in various aspects together with the current situation in the area. I introduced in this experiment, in addition, an active learning of the Arabic characters. The experiment was greatly effective in attracting students' interest in the modern Middle East.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	400,000	0	400,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	300,000	90,000	390,000
総　計	1,200,000	240,000	1,440,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：中東　歴史　文化　宗教　異文化理解　外国語教育　アラビア文字

１．研究開始当初の背景

(1)勤務する大学では(地方大学ということもあるが)、提供される外国語の種類や歴史分野は欧米と東アジアに限られている。近年世界的に大きな注目を浴びているとともに、留学生をはじめとして日本との交流関係も

日常的に急速に密になりつつある中東地域についての情報は、大学の専門教育はもちろん教養教育においても空白状態である。また、高校での世界史未履修が社会的問題となったように、大学生の当該地域に関する一般的知識、情報は欠如している。しばしば叫ばれる「異文化理解」や「グローバル化」が英語文化圏中心となる傾向がますます強くなっていく中で、中東地域の文化、歴史、宗教、言語などについて基本的な知識を体系的に身に付けておくことは、これからの大学生の将来に必須である。このような視点から過去数年、教養課程でヘブライ語を、言語学の専門課程でアラビア語とペルシャ語を教えてきた。しかし、これらはあくまでも言語学習や言語理論の一環としての授業であるため、これらの言語が使われている地域の文化、歴史について触れる機会は少なかった。

(2)この欠点を補うため、教養科目「地域の世界史」の中で「中東の歴史と文化」を新たな試みとして開講したところ(半期、２年間実践)、百名を超える受講希望者があった。授業期間中に数回行なったアンケートによると、昨今の世界情勢もあるためか、異文化としての中東地域には高い関心を持っている一方で、基本知識の不足や誤解も多かった。またアラビア語やヘブライ語については、奇妙な文字を使う異質な世界の言語との先入観もあったので、試みに文字の構造など言語面にも少し触れたところ、イスラーム、ユダヤが身近に感じられるようになった、との回答が多くあった。

(3)以上のような背景から、積極的に初歩的な言語(具体的にはアラビア語)学習をも導入しつつ、中東地域を異文化として理解させるための教育実践を行なうとともに、教授法や教材の開発を模索してみることを考えた。

２．研究の目的

本調査研究は、中東(主としてイスラームとユダヤの文化、宗教、歴史等)に関する講義において、異文化理解と外国語学習とを融合させた教育実践(３年間)を行なうことにより、新たな教授法や教材開発に一定の貢献をすることを主たる目的としている。また、できれば欧米諸国の中東理解教育についても調査し、日本のそれとも比較してみたい。具体的には以下のとおりである。

①中東地域に関する高校レベルの世界史、地理、倫理社会の教科書内容を整理し、これを土台として、(宗教など特定の専門的な文化事象に偏らない)教養教育にふさわしい教材やシラバスを模索する。すなわち専門分野の異なる幅広い学生層にとって、中東地域が我々とどう関わっているのかという現代的意義にも力点を置き、同地域を異文化理解の対象として理解を深めることができるような講義内容、教材の選択を含めた教授法のあり方を模索する。教養教育のあり方が問われている現在、上記の視点は異文化としての中東理解のための教授法、教材開発に一定の貢献をすることが期待される。

②異文化理解の一助として、講義の中に文字習得を目指した初歩的なアラビア語学習を積極的に導入する。アラビア語学習により中東を身近に感じるようになったかどうか、英語とは異なるタイプの言語学習が異文化理解に効果的かどうかなどについて、アンケートで随時調査、確認し、フィードバックする。なお、アラビア語学習は言語習得そのものを目的とした外国語教育ではなく、目、耳、手を通して実際にアラビア文字に触れてみることにより、学期が終わる頃には、(i)文字表記の構造が理解できる、(ii)世界史教科書に出てきた当該地域の地名や人名、用語などが読み書きできる、(iii)テレビのニュース

に現地の文字が映し出されたときに、それと分かる、といったレベルを目標とする。

③歴史的に中東との関係が深い欧米諸国(特にヨーロッパ)では、高等学校レベル、大学の教養レベルにおいて中東がどのように教えられているか、中東が異文化としてどのように捉えられているかという視点から、ヨーロッパ主要国の教科書等を調査、分析する。これは欧米と日本の中東理解に関する比較研究の基礎調査となることが期待される。

３．研究の方法

(1)授業実践：３年間にわたり教養教育で、「異文化としての中東」をテーマとした「中東の歴史と文化」を開講した(各年度１セメスター)。初年度(2010 年度)は試行の年とし、授業実践と並行して基礎資料、教材、情報の収集を行なった。調査、研究の方法と授業実践の内容は概略次のとおりである。

①受講者の均質性および受講者数制限から新一年生のみを対象とした。最初の時間に、受講者が高等学校で履修した社会科の科目、中東に関する受講者の基礎知識や抱いているイメージなどについてアンケート調査した。この結果をもとに、効果的な教授法、授業内容、教材のあり方等を構築する上での参考とした。

②授業内容は、年度により多少の異同はあるが、例えば次のようなテーマを設定した。

中東の地理、民族、言語などの概説／イスラエル古代史と聖書／ユダヤ教とイスラームの基本情報／聖地エルサレムとエルサレムをめぐる問題／diaspora のユダヤ人／十字軍／中東現代史とパレスチナ問題／イスラームと日本、ユダヤと日本／原理主義／中東、イスラーム世界の抱える諸問題／その他

プリント教材には毎回、ネットや新聞の記事、情報(英文を含む)をできるだけ多用し、リアルタイムに起きている中東の情報を盛り込むようにした。プリントは予習、復習、自学に役立つよう１回の分量を多めにした。最終的には１冊の参考資料の形になるよう配慮した。テーマの区切りごとに、直接関連するニュースや特別番組のビデオを見せた。授業の終わりには毎回、小レポートを提出させ、意見、感想、関心の度合いや理解度等をチェックして講義の進め方の参考とした。最終回にアンケート調査を行い、中東全般に対する受講者の関心、興味、意識がどのように変化したのか検証した。

③中東を異文化として理解させる一つの試みとして、短時間で習得が可能な方法を模索しつつアラビア語の文字学習を講義の中に取り入れた。毎回、５文字程度を取り上げ、順次語の綴り方を学びながら、アラビア文字の構造が理解できるよう工夫した。ビデオ教材により実際の音声にも触れられるようにした。最終的には、世界史教科書に出てくる人名、地名、用語、また国名が読めるようになる、ある程度は書けるようになることを目標とした。アラビア文字を学ぶことにより、受講者の中東への関心や理解度が高まったか、中東が身近な異文化と感じられるようになったか、中東のニュースに目を向けるようになったかなどを含め、初歩的な外国語学習が異文化理解に与える効果についてアンケート調査を行なった。

(2)教材：国内外の資料(教科書、参考書類、視聴覚教材、英文を含む新聞記事等)を多く収集し、教材開発に向けての整理、分析を行なった。特に、現代の中東情勢や日本(あるいは日本の地域)との関わりを取り上げた教材を多く収集し、中東が単なる過去の歴史ではなく現代世界に大きな影響力をもっており、また日本や九州地域にも身近な存在であ

ることを伝えるよう工夫した。例えば、福岡市や熊本市に本格的モスクができたこと／九州で中東向けのハラール食品の輸出産業が盛んになっていること／(熊本出身の)青年がかつてパレスチナ問題にかかわったこと／熊本大学をはじめとしイスラーム圏出身の留学生が増加しており、イスラーム理解教育に取り組んでいる大学があること／インドネシアからの看護師、介護福祉士に関する諸問題、などである(下記項目５の報告論文に講義テーマと関連する具体的な使用教材を記した)。現代の中東情勢、ユダヤ民族の歴史、文化については、2011 年１月に、本科研によりイスラエルのテル=アビブ大学等で資料収集をおこなうとともに同国内でフィールドワークに携わる機会を得た。その成果は授業実践にも活かすことができた。

４．研究成果

(1)アンケートによれば受講者の主たる関心は、昨今の世界情勢から報道量の多い現代にあった。その意味で現代との関わりを主要なテーマとして取り上げたことには意義があった。また、中東と日本の地域との相互関係にも触れたことは、イスラームが決して我々日本人から遠い存在ではなく共生を模索しなければならない時代になってきていること、そのためには中東、イスラーム世界についての正しい理解が必要であること、欧米中心の異文化理解では不十分であること等を理解させることにも大きな意義があった。

(2)実際にその地域で使われている言語に触れてみることは異文化理解のための大きな要素となると考え、アラビア文字の習得を評価の一部として義務付けた。短時間で習得するには困難であることは予測できたが、「英語学習とは全く異なる新鮮さを感じ、アラビア文字を学ぶことが異文化理解に大いに意義があった」とプラスに評価する受講者が大半であった。たとえ初歩的であってもアラビア語学習が中東という異文化を身近なものとして捉え、考える動機付けに十分なり得ることを検証した。

(3)受講者に毎回の講義後に提出してもらった小レポート中の多様な意見、感想、要望を授業実践や研究成果の中に十分反盛り込むことはできなかったけれども、この授業実践を＜グローバル世界の一部である中東地域を異文化として教養教育で教えながら、その教授法および教材の開発を目指す＞という当初の目的に向けての基礎的調査研究に結び付けることができた。

(4)当初調査対象としていたテーマ＜欧米における異文化理解教育としての中東＞は、日本でも一部研究が始められている分野であることを本調査の過程で知った。同テーマについては、これらの先行研究を参考にしつつ、今後取り組んでいくべき課題とした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①小脇光男、地域の世界史「中東の文化と歴史」―実践報告―、大学教育年報(熊本大学)、査読無、16 号、2013、pp.36-43
http://www.ge.kumamoto-u.ac.jp/publication.html

６．研究組織

(1)研究代表者

小脇　光男（KOWAKI MITSUO）
熊本大学・国際化推進センター・教授
研究者番号：30136030